

翻  
刻

繫暉日記  
(香川敬三著)

## 解題

香川敬三著、宮内省皇后宮職、明治二十六年刊。四ツ目袋綴。全一卷、四十九丁。本文は漢字平仮名交り文。有栖川宮熾仁親王の題字「永繫天暉」を巻頭に、宮中顧問官高崎正風「序」四丁、本編三十九丁、香川敬三「あとがき」一丁、奥付は「明治二十六年十一月二十二日 皇后宮職印行 皇后宮大夫子爵香川敬三著 御用製本人 吉川半七」。昭憲皇太後の行啓の様子を香川敬三が著したものを高崎正風の薦めで、明治二十三年の京都、奈良への行啓の三年後に香川敬三が編集・刊行。昭憲皇太後の側近が著した日記として、宮内属小出榮著『みくするまのあと』(明治二十四年二月)・権掌侍小池道子『みちのつと』(同年同月)とともに、行啓の様子を伝えるものとして重視されている。

香川敬三は天保十年、常陸国茨城郡下伊勢畑村(茨城県御前山村)の庄屋蓮田孝定の三男として生まれた。祠官鯉沼家の養子となり伊織と称した。水戸藩士藤田東湖の門弟となり勤王を唱えたのち上京して香川敬三と称し志士と交流ことに岩倉具視の知遇を得た。慶応三年(一八六七)高野山の挙兵に参加し、戊辰戦争では東山道総督に従い、近藤勇を捕らえるなどの功があり賞典祿三百石を給せられた。明治初期は軍務に従事、次いで宮内省に移り明治十四年(一八八〇)以降皇后宮大夫として皇后を補佐し、二十年に子爵、四〇年伯爵となり、従一位勲一等旭日桐花大綬章を受けた。大正四年(一九一五)没。墓所は東京都港区の青山墓地である。

本日記は、皇后宮大夫・皇太后宮大夫であった香川敬三が、明治二十三年(一八九〇)四月四日から五月五日の一カ月余り及び京都・奈良への昭憲皇太後の行啓の様子を著したものである。そこには、行啓の経路、移動手段、行啓を迎えた地方官吏

や国民の様子などが事細かに記録されている。既に先学によって指摘されているところではあるが、本日記は、皇后の事績が知られるばかりではなく、その御心も知り得る重要な文献といえる。皇后が御宿で「くさぐさの御ものかたり」をした一話として、皇后の父君の教育方針により、幼少期に庶民の生活を間近で見学したとのエピソードが記されており、皇后が今回の行啓を社会勉強の一環として捉えていたことなどを知ることができらる。

香川敬三に関する詳細な履歴には、皇學館大学史料編纂所編『香川敬三履歴史料』、香川に関する研究には、水谷盛光「尾張・三河路に潜居した香川敬三とその同志」(『日本歴史』二五三、昭和四十四年)・上野秀治「香川敬三が見た明治宮廷の欧風化」(『史料』二二八、平成二十年)があり、本稿における履歴は上野氏のものに依った。資料紹介には同「香川敬三宛岩倉具視書簡」(皇學館大学文学部紀要)二九、平成三年)、同「『岩倉公実記』編纂関係書簡(一)香川敬三関係文書所収」(皇學館大学文学部紀要)四一、平成十四年)がある。また、本日記を取上げた研究には、佐藤一伯「明治聖徳論の研究―明治神宮の神学―」(国書刊行会、平成二十二年)がある。(高野)

## 凡例

- 一、底本は明治神宮蔵本を使用した。
- 一、底本の文体を損なわないよう注意し、字体は原則通行のものに改め、特定漢字のみ原文のままとした。
- 一、仮名遣・踊り字は原文通りとした。

柳もえ桜ほころひ日影うら、かなる朝後の宮の御歌の点つかうまつるとて御歌所の東の窓にうちむかふほと香川皇后宮大夫いりきて懐よりものとうてつ、いはる、やうこはすきにし春奈良芳野わたりの行啓のみともつかへしほとの日記なりことの序に御覽せさせ奉りしにさしもいたつきけむもの乎かくてあらせむはあたらし板に彫てとそとのたまはせしそいとくかたしけなきおのかふみかくことのはつ、なるはいふまでもなければいか、とたゆたはるれと御言にたかひ奉らむも亦かしこしひとわたりみたまひてそのあやまりをた、しかつおほせにしたがふへきかないひ奉るへきかをもさためたまひてよとてさしおかれぬそもくかのをりの日記は、やう小池権掌侍かみちのつと小出御歌所寄人かみくるまの跡なとしるして奉りしを世に公にせさせたまひきいまた同しさまのものとよみもてゆけはさきのふみとも絶てなかりしいとめつられいとたふとき事ともをなむ見いてたるさるは後の宮のをりにふれて宣ひいでしこととのよのいましめ人の教ともなるへきことをあまたしるし奉れる也けりされは寄人かしるさぬことを権掌侍かかけるあり権掌侍からもらせるを寄人か補へるあり此二人か聞しらさること、もをこの巻にはつまひらかにのせられたるもあればさなから鼎の三足ありてたてるか如くかの行啓のほと御事ともは必この三紀行によりてそ明らかなにはしらるへかりけるきさいのみやの板にゑらせよとのたまひしも誠にうへなりと思ひてこ、かしこ筆くはへてかへておくりぬ其後二たひ来て題辞を有栖川宮大將宮にこひまゐらせ一卷の名と序とは君にとあればやかて題辞の語をとり繫暉日記とし叙はこたひの始末をそのま、にしるさむとて筆はとりつれと大夫の意に適りやいなや明治二十五年五月青葉のや、をくらくなれるまとのもにて

## 繫暉日記

明治二十三年四月四日皇后宮京都に行啓あらせられんとて午前七時宮城をた、せ給ふ学習院生徒華族女学校生徒等正門の内外にておくり奉る御道筋には軍人をはしめあまたの人々送り奉るやかて新橋の停車場につかせ給ひ志はらく楼上にいこはせ給ふ東宮常宮をはじめ奉りそのほかの官方御息所大臣その他文武の高等官およびその夫人なとあまた送り奉る是より汽車に召させられ奉送の人々を御覽せらる、まに汽車はす、みて東海道の駅々を過ぎぬ足柄山の入口なる山北の停車場にていこはせ給ふこ、より機関車を御車の前後につけところくの隧道鉄橋など過ぎ御殿場といふ駅までうしろの機関車ははつしほとなく佐野原といふ里にいたる建武のむかし足利尊氏弟直義等後醍醐天皇にそむき奉りしとき官軍の將中務卿尊良親王副將脇屋義助等足柄にむかひしか竹の下の軍破れて佐野原に引き退きしとき親王の股肱とたのませ給ひし藤原中將為冬か討死せしはこのあたりをやとそ、ろにむかし志のはれてそのよし皇后宮の御聴にいれ奉りつればさる忠義の人のうせにし里なりけりやなど仰せらるけふに朝よりはれて富士の雪も手にとるはかりに見ゆ富士のすそ野愛鷹山浮島か原などはるかに御覽せらる清見湯をへて静岡につかせ給ふこ、に御車をむかへ奉れる静岡県知事時任爲基伯爵柳澤保申等に謁を賜ふ御車の左右には男女学校の生徒あまたむかへ奉る皇后宮いとねもころに左右を御覽せらるこ、にて昼のおもの奉り大井川天竜川をわたりうつのやさよの中山などの隧道をすぎさせ給ふ波風の荒井のわたりも今は名のみにて御車のま、鉄橋をわたらせ給ふ左には遠江灘右には浜

名の入江の風景など御覽せられほとんどなく三河にいらひ午後五時すくるところ名古屋の停車場につかせ給ふ主上には過にし三月二十八日東京をた、せ給ひて名古屋にならせ給ひきそはこのほとより御みつから統監し給ふ陸海軍の大演習をおこなはせ給ひしためにそありける過にし日龍駕に陪從せし親王大臣将校をはじめその他の人々あまたむかへ奉ることより御馬車にめさせたまひ行在所（東本願寺別院）につかせ給ふ御道々には軍人学校の生徒をはじめ奉迎の人々あまたつとひていとにきい、し親王大臣その他文武の高等官に謁を賜ふこの夕主上には過し日の陸海軍大演習のありさまなどいとこまやかに皇后宮に御物語あり敬三も御側ちかく召されて志たくしく仰こと蒙り奉るいとかしし

五日主上皇后宮汽車にて名古屋をた、せ給ひて美濃の岐阜に志らくいこはせらるこ、にも岐阜県の官吏をはじめ男女学校の生徒あまたむかへ奉る皇后宮例のごとくその人々を御覽せらる岐阜県知事小崎利準に謁を賜ふほとなく汽車をす、め関か原などの古戰場を過ぎさせ給ふこ、い慶長五年徳川内府石田三成等と戦ひしところなり近江の伊吹山もこのあたりより見ゆるよしなるにけふは雨にていつれの山々も見えて彦根の古城のみ右のかたにはるかに見ゆ琵琶湖のけしきなどいとめつらし鏡山三上山は雨雲のたちへたて、見えあかて勢多の長橋を左に琵琶湖の湖を右に御覽し粟津を過ぎ給ふこのところは木曾義仲か源義経とた、かひてうたれしところなりそれより大津の馬場に志いらく汽車をと、む古、にも人々あまたむかへ奉る皇后宮は例のごとく奉迎の人々をいとねもころに御覽せらるほとなく御車をす、め逢坂山の隧道山科の郷を過ぎ稲荷山月輪山などを右に御覽せられ京都七條の停車場につかせ給ふこ、には山階宮京都府知事北垣國道その他男女学校の生徒ともあまたの人々むかへ奉る五時過るころ御所につかせ給ふ

六日事なし  
七日事なし

八日主上皇后宮先帝の御陵をかみ給ふ主上は泉涌寺より還幸まし、ぬ皇后宮は東福寺なる御父左大臣藤原公の御墓に詣て給ひまた月輪殿の御墓にもまうて給ふ御かへりの道に首啞院にたちよらせ給ひ生徒等の授業のありさまなど御覽せられおしの手まねしどものまなひ目くらの手さくりしてふみよみ算術などまなふさまいとあはれにおほすまた教員のしふるさまなどいとこまやかに御たつねありて夕つかたかへらせ給ふ

九日正午御所をた、せ給ひ滋賀県下大津の三保か崎といふところにならせ給ふ北垣京都府知事申井滋賀県知事の夫人たちこ、にむかへ奉り謁を賜ふこのところは琵琶湖のほとりなり過にし年より北垣京都府知事のおもひたちて湖の水を京都にそ、き水利の便益をはからんとて政府にこひその許可を得て疏水の工事をまぢ奉りか今年その業のすてになれるをもてこたひの行幸行啓をまぢ奉り奉りしによりてけふこ、にならせ給ふなり主上にはこの日朝まきに大津なる滋賀県庁に行幸あらせられし皇后宮のつかせ給ひし古るこ、にはならせ給ふ滋賀県知事申井弘も御供にてまゐり謁を賜ふしはらくして北垣京都府知事を召し疏水の実況をきかせられほとなくた、せ給ひてその要処なる関門など御覽せられ蹴上にてまた水路のありさまを御覽せられ賀茂川の東なる夷川の疏水式場の御休所に入らせ給ひて式場のと、のふをまたせ給ふ志はらくありてと、のひつるよし奏せしかは式場に臨ませられ勅語を賜ふ北垣京都府知事答弁奉るまた御休所に入らせられや、ありてかへらせ給ふ

十日午前京都博覧会にならせらるこのと古るに赤十字社京都支部

の総会を開きむかへ奉りしかは御休所の階下ちかく社員を召し給ひけふ古、に臨み社員を見そなはし給ふこといとよろこほしいよ／＼本社の盛んならんことをおほほしめすよし小松宮もて仰ことをつたへさせ給ふそれより博覧会の品々を御覽せられほとなくかへらせ給ふ

十一日事なし

十二日主上皇后宮御同列にて聖護院なる山階宮の邸にならせ給ふこは宮の能楽を催して御覽にいれ奉らんとて行幸行啓をこひまゐらせ給ふによりてなり日くる、まで御覽せられ夕のおものを召させられてかへらせ給ふ

十三日より十六日まで事なし

十七日午後桂離宮にならせらるこ、はもと桂宮の別業なりしか淑子内親王薨したまひしのち離宮とはなりぬこの離宮の庭はむかし小堀遠江守のものせりとなん山水のさまおもしろく筆にも言葉にもへつくしかたしけふこ、に召されたる人々には有栖川宮(熾仁親王)山階宮小松宮おなしく御息所三條内大臣おなしく夫人土方宮内大臣北垣京都府知事および敬三なり御庭におりさせられ松琴亭のまへにて築山遣水のさまなど志はらく御覽せられ召しの人々をはしめ御供の人にも御菓子なとたまふそれより御庭残るくまなく御覽せられ御座につかせ給ひ人々に酒肴なと賜ひいとぬもころなる御物語などあらせられて御盃賜はり夕かたかへらせ給ふ十八日朝主上は京都をた、せ給ひて神戸にて軍艦の観兵式を行なはせ給ひそれより安芸の呉肥前の佐世保軍港を御覽せられんとて神戸より軍艦に召されていましぬ皇后宮にも古の日京都をた、せ給ひて奈良のかたにわたらせ給ふ伏水の工兵營舎のかたはらに軍人の集会所ありこのと古ろにて志はらくいこはせられ将校等に謁を賜ふこの集会所の庭いときよらにつくりなして奉迎のまこ、

ろをあらはせるを御覽して殊勝のことにおほほしめされ何人のつくれるにかと御たつねありければこは兵卒とものつくり志よしきこえあけしにかんしおほしめすよし敬三もて隊長工兵少佐渡部当次につたへさせ給ふまた御休所の広間に築城野堡架橋副防禦等の雛形あり御供にさふらふ近衛中佐鮫島重雄は工兵科の軍人なればこれを召してくはしきかせ給ひか、る軍のことははしめてき、ぬなと仰ことありければ鮫島中佐いとかたしけなみ奉るほとなくた、せ給ひて観月橋(もと豊後橋といふ)のつめに御車よりおりさせ給ひ橋の中央にて伏見工兵隊のものせし水雷火を御覽せられて宇治の御休所(上田俊造)につかせ給ひ昼のおものを召させらる古のころより川のむかひにあたり喜撰法師か居住せし宇治山もはるかに見ゆ御側に侍る女官たちかの亀石はいつこならんなどいふを皇后宮きかせたまひてそはさきつとし京都に行啓のをり皇太后宮と、もに古、にならせ給ひしをり御船にてこの川をのほりたまひしにその亀石は水中に御覽したまひつるよしのたまふ北垣京都府知事の代理にて御供にさふらふ書記官尾越蕃輔に謁を賜ふ渡部工兵少佐も伏見より古のころまで送り奉りて謁を賜ふ志はらくして古、をた、せ給ひ玉水に御休ありて井手の玉川なとち過ぎたまひ奈良の御泊(奈良倶楽部)につかせたまふ奈良県知事小牧昌業御途中より御供してまゐる謁をたまふこのと古ろの人民ともこたひの行啓をかしく古みよろこひ奉りて御なごさみにもとて大和万歳伊勢神楽など御覽に入れ奉る夜にいりて里の少女か琴の志らへをきこしめした焚木能も御覽せらる古の能は奈良にのみかされるよし

十九日朝奈良県書記官をはしめその他高等官の人々に謁を賜ふそれより春日神社に詣て給ふ宮司水谷川忠起御先つかうまつる社前にす、ませ給ひ御玉串をさ、け給ふ神楽神子舞など御覽せらるま

た回廊につらねたる宝物など御覽せらるるそれより神輿にていてます道のほとりに鹿あまたつとひたるを御覽せられ御側の人におほせて食物などあたへさせ給ふにたれくしく神輿のあたりまでまゐるもいとをかし若草山の麓にて御輿よりおりさせ給ひ御徒歩にて山のなかはまてならせ給ふをりから厥のもえいてたるを御覽してとらせ給ふ御供の人々もとりて奉る古歌にいまもなほつまやこもれる春日野の若草山に鶯そなくとあるはここの古なるへし志はらくいこはせたまひて四方八方を御覽し西のこたにあたりたかくそひえてはるかに見ゆるはなにといふ山にかと御たつねあるに生駒山となんまうすとこたへ奉る皇后宮のたまふやう伊勢物語にかふちのくにいまの山を見やれいくもりみはれみたちるる雲やますあしたよりくもりてひるははれたり云々とあり白雲のか、れるさまその言葉のことしなどのたまふ古、よりまた御輿に召されて手向山八幡宮の社前を過ぎ給ひ三月堂にならせたまふこの堂は法華堂なり三月堂といふは三月に法会すればなり背面にいのかめしくたちたまへるは執金剛神とまうして仏法守護の神なりとそ古は天慶の昔し将門征討のをり朝廷よりこの神に御いのりありしよ志それより観音堂にいらせらる古、も二月に法会をすればは二月堂とそいふ開山堂地蔵堂鐘楼など御通覽ありて御車に召しかへられてけさの御宿にかへらせ給ひ午後東大寺の大仏殿にならせらるこ、の広庭に奈良県会議員赤十字社員など奉迎せるを見そなはしそれより大仏を御覽せらるこは聖武天皇の御建立にていと大きなる仏像なわけは古とにめつらしくおほしめさるこの仏殿のめぐわに仏像そのほか新古の品々などつらねたるを御覽すまたこの場に蓄音器ありきかせたまひていとおもしろしとのたまひて御側の人々にもかはるくきかじめ給ふそれより正倉院宝庫の御物を御覽せらるこは聖武天皇崩し給ひしとき孝謙天皇のをさめたまひし

なり御藏の戸前三ツあるをもてよに奈良のみつくらともいふそれよりまた猿澤の池を御覽せらる大和物語にむかし奈良の帝まつかへまつりし某の采女ゆゑありて古の池に身をなけてうせにけるとなん丸の歌にわきもこかねくたれかみを猿澤の池のたまもと見るそかなしきとあり興福寺を御覽ありてほともなく御宿にかへらせ給ふ

二十日あさまたき御車に召させられ奈良をた、せ給ひ三輪村(大神神社教会所)にいこはせられ大神神社(官幣大社)に詣て給ひ御玉串をさ、け給ふこは神代より鎮座すいとたふとき御社なりとし古れより初瀬にならせ給ふ道いとあしければ御輿を奉り長谷寺の観音堂にならせ給ふ白鳳二年の創建のよしなるかその、ちみたひはかり焼失していまの堂宇は慶安三年の再建なりといふ道のほとりに紀貫之の手植の梅といふもあり花そむかしの香に、ほひけるといへる歌も古のわたりにてよめりとなん道の左右にうゑたる牡丹さかりなり小池房にて昼のおものを召させらる長谷寺の宝物など古につらねおきて御覽に入れ奉るそれより十市郡桜井村の来迎寺にいこはせ給ひ多武峰談山神社にまうて給んとて一の鳥居まで御車にてならせ給ひこ、にて御輿を奉るやまをのほらせ給ふこの日は朝より雨いたくふりければいか、おはしますらんなど御供の人々あんし奉りしにやまにか、らせ給ひしころは雨やみぬ社につかせ給ふや、ありて御玉串をさ、け給ひ御帳のうちをまつせ給ひ親しく神像をもをかみ給ふこの御社は太織冠鎌足公をまつれるなり公は天智天皇御宇八年十月十六日薨せられしを御子の不比等公撰津国島下郡阿威山に葬りまつられしを白鳳七年九月長子定慧和尚勅を奉してこの山に改葬し大宝元年公の神像を安置したりといふかしくも皇后宮は藤原氏にましますは古たひの御まうておほ志めした、せ給ふとそ拜殿には公の縁記をはしめくさく

のものをおきて御覽にいれ奉る公の御墓にもまうて給ふた山をくたせ給ひ一の鳥居より御車に召され桜井の御宿(來迎寺)につかせ給ふ志はらくして大雨盆をかたふるるか古とくふりしきるこの里人もこたひの行啓をかし古みて里の少女等に琴ひかせて御聴にいれ奉る

二十一日桜井をた、せ給ひ御途中御車をと、め給ひて天の香具山耳なし山畝火山啼澤の杜なと御たつねありそれより樞原の畝火山東北なる神武天皇の御陵にまうてたまはんとてまつ勅使館にて御きよめなとすませ給ひて御陵の御前に御玉串をさ、け給ひてねもころにをかみ奉らせ給ふこの山陵へはむかしより皇后宮のまうてたまひしことは文にも見えす古たひの御まうて古そいとめてたきためしにはありけれまた勅使館にかへらせたまひてた、せたまふ戸毛の御休(西尾孝平)につかせたまひ昼のおものを召させらる古れより吉野山まではみちいとあ志きよしなれは古の里より御輿たてまつる車坂といふ山のいた、きに御野立の設けありしに古はせられ山水の景色なと御覽したまひ里人を召し敬三してを古ちの山の名なとはせ給ふ吉野郡下市村なとも吉野川のほとりに見ゆいとけ志きよし古の下市村はむかし三位中将平維盛か志はしよを志のひし里なりとそ御供にさふらふ近衛の將校をはしめ小牧奈良県知事なとを御前ちかく召して御菓子なと賜ふ志はらくして御輿をす、め越部の御休(吉條久米徳)につかせ給ふ古の里の入口に十津川郷土奉迎所と志るしたる札をたて、郷士の迎へ奉るを御輿のうちより御覽せられいと殊勝におほしめさる、よし仰古とありほとなく六田の渡りにか、らせ給ふ古たひの行啓のためにとて古のわたりの人民あひはかりて橋をかけたたり古歌にさくらさく水分山に風ふけはむつたの淀に雪そつもれるとあるはこ、なるへし古れより吉野山にはほとちかきよしなれは菜摘川といふはこの

わたりにやと里人にとへはそは古の六田のわたりよりすこしかみのかたなるよしいふされは元弘三年大塔宮護良親王吉野山に兵をあけさせたまひしとき鎌倉より二階堂出羽入道か六万余騎の兵をひきみ來り菜摘川の川淀より城のかたを見あげたれば峰には赤旗白旗錦の旗みやまおろしにふきなひかされ雲か花かとあやしまる麓には数千の官軍かふとの星をか、やかし鎧の袖をつらね錦繡志ける地のことしされは数千万の兵にてせむともたやすくおつへしとは見えさりけり云々と太平記にあるを敬三いとけなかりしときよみたりしか古のあたりもその戦のあとにもやあるらんなどそ、ろにむかしをおもひやらるこの橋をわたり給ひ一の坂といふをのほらせ給ふ古のとき吉野川に筏をくたして御覽にいれ奉る志はし坂のなかほとに御輿をと、め御覽せらるなればやけりい矢を射るかことしそれより吉野山にのほらせたまふ一と目千本といふ所に御休所のまうけありこは上市村の北村又左衛門といふ篤志の人の自費もてまうけ志よし小牧奈良県知事か物語ければ直に御聴に入れ奉るいと殊勝なるよし仰古とありて御休所の前にて又左衛門を御覽せらるこ、は見ゆるかきりは桜なれとも古の春ははや花はちりはてたりをちこちたつねさせ給ふうちひと木ふた木ちりのこりたる花を御覽せられこは都に御かへりのをり主上の御覽にそなへまゐらせん枝をりてよと仰ことありければ敬三

我君のいましまちて桜花みやまかくれにちりの古りけん

これより吉野の里にいらせらるこの里人等御道筋の両側に樹木なとうゑつつけ提灯あまたかけておもひくまこ、ろをあらはしたるさまいと殊勝におほしめさるまたこの山家のかたはらに白布もて岩のうへより引たらし瀧のさまをつくりたりしをさるもの、ありとはたれも古、ろつかさりしを皇后宮見そなはし給ひいと殊勝におほさる、よし仰ありければ敬三かしこみて吉野郡長吉田正

義にとひつるに郡長もこゝろつかさり志よしいふのちにきけは吉田町の山本萬次郎といへるかもせしなりとそれより蔵王堂にならせ給ふ本尊は蔵王権現左は觀世音菩薩右ハ弥勒菩薩なりこの堂は天平年間の開基なりといふ貞和五年正月十四日賊将高師直師泰等吉野の皇居をおそひ奉りしかは後村上天皇は天の川の奥なる賀名生のほとりにおちさせ給ひしを賊徒等古の蔵王堂に火をかけ無慘にもやきはらひたりとなんいまの堂は豊臣太閤の再建なりとそまたこのと古ろは元弘のむかし大塔宮護良親王のこもらせ給ひしを二階堂出羽入道かせめ来り宮の御座ありける蔵王堂に打てかゝりければ宮いまはのかれぬところなりとおほ志めしておとらぬつはもの二十余人前後左右にたて、敵の大軍にはしりかゝり切てまはらせ給ふによせて大勢なりしかわつかの小勢にきりたてられ木の葉の風にちるかことく四方の谷へ引しりそきしかは宮は蔵王堂の大庭に暮うちあけて最後の御酒宴をもよほし給ふ御鎧にたちたる矢をもぬき給はすなかる、血をもぬくひ給はす大盃をかたふけさせたまひすてに御討死と覚悟したまひしところに村上彦四郎義光鎧にたつところの矢十六すち枯野にのこる冬草の風にふしたることくにをりかけて宮の御前にまゐりてまうしけるははや敵すてに古、にせまれりこのと古ろにて功をたてんこといまはかなはしはやく一方を打やふりてひとまつおちさせ給へ義光は錦の御鎧直垂と御物の具をたまはらは御諱の字をおかして敵をあさむき御いのちにかはりまゐらせんとまうしければ宮のたまふやういかにてさることのあるへき汝等と、もにこゝにて討死をこそせめと仰せられければ義光言葉をあらゝかにしてかゝるあさましき御事にて天下の大事をおほ志めしけるこそうたてけれと御鎧の上帯をき奉りければ宮けにもやおほしけん御物の具鎧直垂までぬきかへさせ給ひ涙をなかさせ給ひながら勝手手の明神の前を南へむかひてお

ちさせ給へは義光は二の木戸の高槽にのほりはるかに見おくり奉り宮の御うしろかけのかすかにへちたるを見ていまはかうとおもひければ槽のさまの板をきりおとして身をあらはにし大音声をあけて名のりけるは天照太神の御子孫神武天皇より九十五代の帝の第二の皇子一品兵部卿親王尊仁逆臣のためにほろほされ恨を泉下に報せんたねにいまこゝに自害すといふまゝに鎧をぬきて槽より下へなけおとし錦の直垂の袴はかりにて小袖をおしたぬきて腹かき、り太刀を口にくはへて伏したりけり敵これを見てすはや大塔宮の御自害ありわれさきに御首をとり奉らんとて四方のかこみをときてこゝにあつまりけるそのまに宮はひきかへて天の川へそおちさせ給ひけるとなん太平記にありける当時のありさまなど御聽に入れ奉りければ皇后宮あはれなることにおほしめして志はしかほとこの大庭をうちなかく給ひ義光か忠義のほとをもおほし給ひしにやのたまふやう一と目千本のみちのかたはらに義光か墓のありしを見そなはしつるよし仰ことありきはとありかたきことになんありけるこれより吉水院にならせたまふこは延元のむかし後醍醐天皇のわたらせ給ひしところにて楠正行をはしめ忠義の人々守護し奉りしところなりけりの宮居とはまうしなからいと狭隘なると古ろにて皇后宮にも吉野の皇居はかゝるところなりけるよとおほしめす御古、ろのほとおしはかり奉るもかしこし御遺物などこまやかに御覽せられことにむかしを志のはせたまひ御なみたにむせ給ふ御供の人々も打志をれて袖をそぬらしける後醍醐天皇は延元四年八月九日より御なやみありて次第におもらせ給ひのたまふやう朕国賊をほろほし天下をたひらけざるをうらむと仰せたまひまたのちの南朝の帝をはしめつかへまつる忠臣義士朕か志を体し力をつくして朝敵を打ほろほせよもし命にそむき義をころんせは君も継体の君にあらず臣も忠烈の臣にあらずと仰ことを

遣したまひ終に同月十六日の夜剣を按し崩し給ふ御葬送の御古と  
なとかねて御遺勅ありしかは御終焉の御かたちをあらためず棺槨  
をあつくし吉野山のふもとなる塔の尾の山陵に葬り奉りきとそ  
こ、ろなきものたにもこの古とをき、たらんには切齒扼腕にたへ  
さらましかしこも皇后宮の御なみたにくれさせ給ふ御古古ろの  
うちおしはかり奉りて敬三もなみたせきあへす文治のむかし源義  
経もこの院にこもりあたり志よしその居間とせしところいとふる  
ひた里静のむかしかたりなとおほしいたさせ給ひそ、ろにむかし  
を志のはせ給ふこの院のうちに後醍醐天皇の御像を安置して吉水  
神社と称し奉るよし宮司の奏するにまかせをかみたまふそれより  
吉野塔の尾なる後醍醐天皇の山陵にまうてさせたまふこの御みち  
すちは古とにけはしくて御供の人々も困しはてたるか御いとひも  
なくのほらせ給ひ山陵の御前にいたりいとねもころにをかませ  
給ふ御ありさま見あげ奉る人々もなみたせきあへす敬三

そのかみに我もありせは大君の志このみたてとならましものを  
それより如意輪寺にならせ給ひ楠成正行正儀菊池武光兒島高德  
などの画像をも御覽せらるまた正行の死を決し如意輪堂の扉にか  
へらしとかねておもへは梓弓なきかすにいる名をそと、むると矢  
しりもて志るしたる扉をも御覽せられ如意輪堂にいらせらるこの  
堂はむかしやけうせていまのはかりにたてたるよしなり正行主従  
死を決し先帝の山陵にまうてこの堂にて一族主従四十三人の姓名  
を過去帳にかきつらねかの歌を志るそのむかしを志のはせ  
給ひてや堂のうちを志はし御覽せらる日もはや西におちてそらも  
なにとなく雨をもよほしければ御宿にかへらせ給はんことをこひ  
奉りまたさきにのほらせ給ひしつ、らをりのけはしきやまちをく  
たらせ給ひ吉野町の竹林院なる御宿にならせ給ひてのたまふやう  
すきし日より雨ふりつ、きみちのあしきにけふもまた朝より雨ふ

りつへきそらのけしきなれば山陵へまうてさせ給はんことはかた  
からんと大夫のまうしつればいか、あらんとおもほしなからも志  
ひていてつるかひありて山陵をかみしそいとうれしきまたこの  
吉野にもせしは花のためならてこの山陵にまうて給はんこの御  
こ、ろにおほしまし、よし仰せらるいとありかたきことにこそあ  
りつれとかしこみねこの夜吉野の奥なる天の川の里人あゆあまこ  
なといふ魚をとりて奉るこの里人はむかし南朝につかへまつりて  
忠義をつくし、人々のすゑなれはいまもなほ皇室を志たひ奉りて  
かくまこ、ろもてものさ、け、れはいと殊勝におほしめし目録な  
とたまはる

廿二日朝吉野をた、せたまふをり御輿にめさせなから昨夜あゆな  
と奉りし人々を見そなはしたまへはその人々もかしこまりつ、感  
涙をもよほしけりきのふ御覽せられし如意輪堂吉水院蔵王堂など  
御輿のうちよりはるかに御覽せられ御なこりをしくおほしめし  
つ、六田のわたりをすきさせ給ひ越部の御休につかしたまふこ、  
にて昼のおものをめさるへきはすなりしに正午にはまたはやけれ  
は戸毛にて召させたまはんとてこのところには志はらくいこはせ  
たまひてた、せたまひきのふ御やすみありし車阪の御野立にいこ  
はせ給ひ御供の人々にまた御菓子なとたまはりてた、せ給ふ戸毛  
につかせ給ふ御途中雨にはかにふりいて、近衛の将校をはしめ供  
奉せし人々のいたくぬれたるをいたはらせ給ふよしのたまふこ、  
にて昼のおもの奉るこれより御車にめして樞原の神宮にまうてた  
まふこの神宮はすきにしころよりこのわたりの人々かたらひて神  
武天皇の御霊をいつきまつりことしの三月官幣大社に列せらる社  
をいとなみたる地は樞原の宮居のあとなるよし神殿には京都の賢  
所拜殿には神嘉殿をたまはりきとそそれよりきのふ御やすみあり  
し勅使館にいこはせ給ひ桃花鳥田岡なる綏靖天皇の山陵をかみ

給ひて田原本の御宿(浄照寺)につかせ給ふ敬三も御前にさふらひけるかくさく(の御ものかたりのうちに)のたまふやう皇后宮またいとけなくて父君の御もとおは志まし、ころ御館のほとり商人の家ちかきところ物見をつくりて御子達のものみたまはるに家司のにせはやとおほし家司を召してそのよし仰せたまひけるに家司のまうすやう物見なんといへるものは富有なる人のなくさきみものするものなれはおもひやませ給へかしたこたへまうしければ父君のたまふやうこはなくさきみにはあらずもはら御子達のためにものせんとおもふなりそは貴き人は賤しき人の生活のありさまなどとのあたり見ることのまれなれば下の情に通しかたく成長の、ち家人などおほくめしつかひ家政をもとりおこなはんとおのれのみおこりたかふりて志もあはれむこゝろ露たにも志らぬ人となりなんことのいたはしければ市ちかきところ物見をつくりて貴賤の人のゆき、商人の家業にはけむさまなどおのあたり日々に見たらんにいなかく(に)たすけともなりなんとおもふなれはとく(つ)くれと仰せたまふ家司もいまはいなみかたくつくりてけりやかて父君御子達をいさなひてかの物見にわたらせ給ひたふとき人またはいやしき人などのゆき、を見せ給ふに物見のむかひに染物屋ありけりその家業をいそしむさまを御覽して父君のたまふやうあれ見たまへいとけなきものまで親と、もにきたなけなる状にてひねもすお古たらすはけむそかしあはれ御子達もかれか古とく学問をはけみたまへなどのたまひつることのありしかこたひのいてましはいとも大なる物見なりと仰ことありいとか志こしすきし日奈良を御たちありて吉野のならせられまかへ奉るそのうちにかしふ御みち(く)に学校の生徒ともあまたむかへ奉るそのうちにかしらに粟粟おきたるいとけなきものまで銃砲もちささけるやまひ奉るさまを御覽せられいと殊勝におほ志めしか、るいとけなき

ときよりもこのふのさまにやしなひなは徴兵のをりこよなきたすけともなるへくまた他日国家のためともなりなんなくさく(あ)りかたき仰ことありけりこの田原本の里人もけふこゝにわたらせ給ふ古とをいとありかたきおもひ奉りて里の少女にとの琴のしらへ舞の手ふりなど見そなはし給はんことをねき奉りしにまかせ夜にいでりて御覽し給ふ小牧奈良県知事山内宮内書記官も御前ちかく召されて陪覽す

廿三日午前田原本をた、せ給ひて法隆寺にならせたまふ中官寺をもて御宿とす昼のおものを奉り午後法隆寺を御覽せらるこの寺は聖徳太子のたて給ひしにていとふるくめてたき佛像仏器などことにおほし図書履稲生真履御供のかすにさふらひてそのゆゑよしをのふるを敬三よりきこえあく堂々のこるくまなく見たまひてそれより西圓堂にわたらせ給ふほとに雨いみしくふりいてぬれば日古るならはせたまはぬ御徒歩にてわたらせ給ひ御衣のうるほひて御風なとめさせたまひなはいともかしこしときこえあくれば皇后宮わらはせたまひてたまふやうすきにし日主上の名古屋にわたらせたまひ雨風をいとはせたまはす陸海軍の大演習にのぞみ給ひまたふかき海あらき波をいとはせたまはす西海にわたらせたまひしことをおもひ奉ればかばかりの雨はもの、かすかはとを、しくのたまひてつひにあゆませ給ひしものとかしこし大阪府知事西村捨三まゐり調を賜ふあすは法隆寺をたちて大阪にたちよらせたまひそれよりた、ちに須磨にならせ給はんとかねてきたためおかれつれとさては大阪にいこはせ給はんことわつかにひと、きにもたらぬをいとほいなくおほしめして朝とく法隆寺をた、せたまひおなしくは大阪になかくおほ志まして人民のつとひむかへ奉るをも見そなはさんと仰せ給ふいとありかたき仰ことなればこのよし西村大阪府知事につけしに知事も仰ことのありかたきをかしこみそ

のよし大阪の人民につたへしにみなくうちろこひていよ／＼御仁徳のありかたきをかし古み奉り志よしのちにくはしくまうしおこせたり

廿四日朝小牧奈良県知事を御前ちかく召してたまふやうこの県内にわたらせたまひしに人民かたらひて道きよらにつくろひまこ、ろをつくしてむかへまゐらせしさいと殊勝におほしめすよし仰ことありてその人々に目録たまひ知事にも物なと賜ひけりこの日も朝より雨ふる昨夜よりの大雨にて立田川にちかき大和橋おちたるよしつけきぬ人々いたくおとろきしかとほとなく修繕とのひければ御徒歩にてわたらせ給はんことをつかさのものよりまうしおこせしにこひ奉りしかはた、ちにてさせたまひつ、かなくわたらせ給ふ御途中立田山などはるかに御覽せられ河内の柏原(寺田七郎平)につかせ給ふこ、にて昼のおものを奉る大阪府の官員このと古ろにむかへ奉りいづれも謁を賜ふこ、より大阪鉄道会社のまうけおきたる汽車にて大阪湊町の停車場につかせ給ふこのと古ろには大阪なる第四師団の軍人をはじめ官吏その他の人々あまたむかへ奉る師団長陸軍中将高島駒之助をはじめ高等官に謁をたまひそれより御車にて同府の博物館にならせ給ふこのと古ろには大阪在勤の勅任官その夫人および府会議長をはじめその他の人々あまたむかへ奉るを見そなはし御休所にならせたまふこの御休所は当府有志の人民かたらひてあらたにつくりまうけしと古ろにていときよらなりこ、にて高島師団長の夫人西村府知事の夫人等五六人に謁を賜ふ御休所のうしろのかたには府下豪家の子女清楽を奏して御聴にいれ奉りいとにきは、し西村知事を御前ちかく召してたまふやう有志の人々よりいとめつらしき楽を奏してなくさめ奉りまた菓子造花など奉りしこ、ろさしのほとり／＼よろこはしくおほしめすよし仰ことありければ知事もいたくかしこ

みね志はらく御やすみありて書画陶器漆器その他古器物等あまた陳列したるを御覽せられた御休所にならせ給ひ奏楽なときこしめされほとなくた、せ給ひて梅田の停車場にならせ給ふこのと古ろに山陽鉄道会社より汽車をいたしてむかへ奉る御召汽車はすきし日東京より召されたるをもちひ給ひ同社の車には御供の人はかりその神戸の停車場に志はらく御車をと、めて機関車をかへほとなく須磨をへて舞子の浜にそつかせたまふこのと古ろはつねには停車場なきところなれと同会社のいとあつきこ、ろさしにて松原のうちにあらたに停車場をいとなみつくれり汽車をおりさせ給ひ御宿(河合宇兵衛)につかせ給ふこ、に御車をむかへ奉りし陸軍少将岡澤精兵庫県知事林董をはじめ鉄道局兵庫県等の高等官ならひに山陽鉄道会社社長正六位中上川彦次郎にも謁を賜ふこのと古ろは名た、る須磨の浦辺のけしきいとめつらしく淡路島もまちかく見えてその風景ことはものへつくしからしすきにし日京都をた、せたまひてより大和河内の山々のみを御覽せられしにけふこの海辺にならせたまひければいとめつらしくおほして夕のおものなとも見わたしよき御座にて召させらる夜にいりて淡路島の里人の煙火うちあけてはるかに御覽にいれ奉れば戸もさしたまはて御覽したまふほとにはかに雨ふりいてかみなりはためきければ敬三御座の戸をさしてよと下司の人にいふを皇后宮させたたまひ淡路の里人かまこ、ろをおほしたまひす古しの雨はいとはし戸はさ、すて御覽せんとしたまふもいとありかたきことになんほとなくそらはれぬ古たひの行啓のためにこ、は電気燈をてらし、か夜ふけてそのひかり松の木立をてらすさまあたかも明月のことしなと御側の人々まうしければいさ御覽したまはんとたかとの、戸をあけさせたまひて御覽せらるこの日主上には御船を玄海灘にす、めたまひしか海上霧ふかくして御船すすみかたく下の関へかへらせた

まひ志よし電報ありければ御こゝろくるしくおほしめしやかて電報もて御けしきうか、はせたまふ

廿五日朝舞子の浜へにて海士の子にあみひかせなきさちかくならせたまひ引きあけたるあまたのいを、御覧せられいとめつらしくおほしめさるそれより御徒歩にて舞子の松原にならせ給ひ松露とらせたまふ御供の人々もとりて奉るほともなくちかきわたりなる有栖川宮の別荘にわたらせ給ふこ、はいとけしきよきところにて古のほと主上の御船をよせさせ給ひし小豆島などもはるかに御覧せられ昼のおもをめさせらる御供の人々も酒肴など賜はる林兵庫県知事も御供して謁を賜ふむかし平敦盛か所持せし青葉の笛に縁起など、りそへて御覧にいれ奉るやかて日も西にかたふきぬれば御宿にかへらせ給ふこれより京都にかへらせたまはんとて汽車にめし汽笛の古えともろともに舞子の浜をた、せ給ふ奉送の人々あまたつとひいとにきは、し神戸の停車場に志はらく御車をと、め機関車をかへていてさせ給ふそれより大阪に御車をと、め給ふ古、には第四師団の軍人をはじめ奉迎の人々あまたつとひたりはるかに左右を御覧せられほとなく御車をす、め夜にいり京都七條の停車場につかせ給ふこ、より御車を奉りて御けしきいとうるはしくかへらせ給ふ山階宮三條内大臣その他供奉の人々に謁をたまふ正六位中上川彦次郎もおくり奉り謁を賜ふ

廿六日事なし

廿七日午前御車に召し加茂川東荒神橋のほとりなる京都織物会社へならせ給ふこのところは仏蘭西国里昂の織物染物などのわざをならひつたへてものすと古ろなり御国ふりの織物の機などもあまたありまつ同所に志はらくいこはせられ御徒歩にて工場にならせたまひくさくめつらしきあやにしきおるわさいとくるさまざま

と古まやかに御覧せらる御国機西洋機かそへもつくされぬほとにたてならへいとさかんなりそれより織物のもやうのかきわりあやとりのわりたしのさまざま瓦斯の火も御覧せらるまたもと西洋のそめくすりもていとそむるさまなども御覧せらるまたもと御休所に志はらくいこはせられ河原町の京都高等女学校にならせ給ふ北垣京都府知事むかへ奉るこ、にて昼のおもを奉りて教場にならせ給ひ生徒の事業を御覧せらる読書算術書画裁縫などこまやかに御覧せられまなひし年のほとにくらふれはおもひのほかにわさす、みたる生徒などもまれにありしかは殊勝におほしめすよし仰古とありきまた御休所に志はらくいこはせられこ、をた、せ給ひ二條の離宮にならせ給ふこ、はもと二條城といひて徳川將軍のものせし城なりしか王政維新の、ち離宮とはなりぬこの城の中門車寄などは豊臣太閤のきつきし伏見桃山の城にありしをこ、にうつしたり志よし彫刻などいとたくみに見ゆ白書院黒書院などいふ間のうるは志き古と京都の宮殿にもまさりぬへし徳川氏代々驕奢のほとそ志られけるなど御供の人々いひあへり皇后宮にもかほとうるは志からんとはおほしたまはさり志よしのたまふ古、に志はらくいこはせられ夕つかたかへらせたまふ

廿八日より五月一日まで事なし

二日午後有栖川宮（熾仁親王）小松宮西郷海軍大臣土方宮内大臣徳大寺侍従長西四辻侍従山口主筆局長池田侍医局長岩佐侍医および敬三を御所の中宮御殿に召しすきし日より主上皇后宮に供奉せし労をねぎらはせたまひ御前にて酒肴たまはりうちとけさせたまひし御ものかたりありて御盃など賜はりけり

三日事なし

四日事なし

五日主上皇后宮京都をた、せたまひて東京にかへらせ給はんとて

すてに御供の人々なともうちそろひたりしにきのふよりの雨にて近江のほ川のほとりなる鉄道そこねたるよし井上鉄道局長官の奏せしかはけふの御立は見あはせたまふよし仰せいたされけり六日午後主上皇后宮京都をた、せたまひて七條の停車場につかせたまふ奉送の人々あまた古、につとへりほとなく汽車にめしたまひ大津の馬場に志はらく御車をと、めたまふこ、にも奉迎の人々つとへり中井滋賀県知事の夫人も古、にむかへ奉りつれば御車のうちめして謁を給ふほとなく御車を發し勢多の鉄橋をすきたまふけふはよもの山々も見えてすきにし日にくらふれはいとはれやかにて御車のうちもなにとなくにきは、しく御けしきもいとuringはしくおはします近江路をすき美濃路をへて尾張の名古屋につかせ給ふこ、には師団の軍人をはしめ人々あまたむかへ奉る汽車をおりたまひ御車にめして東本願寺別院の行在所にならせたまふ御道々には奉迎の人々あまたつとひていとにきは、し

七日朝名古屋をた、せたまひ三河遠江をすき駿河の静岡に志はらく御車をと、めたまひ昼のおものをめさせられほとなく御車をす、め天竜川大井川阿部川富士川なとすきさせたまひ沼津駅にて列車の前後に機関車をつけ足柄山にか、らせたまふけふはくもりて富士は見えず佐野原もすき御殿場にて後の機関車をはつし志はらく山北に御車をと、め国府津大磯をへほとなく横浜もすき新橋の停車場につかせ給ふ古、には皇太后宮東宮をはしめ奉り官方御息所大臣および諸家の夫人その他の人々あまたむかへ奉る汽車をおりさせたまひ停車場の楼上にて志はらくい古はせられ奉迎の人々に謁をたまふそれより御車にめさせたまふ御道々には軍人をはしめあまたむかへ奉る主上皇后宮御けしきことによるはしく宮城につかせたまへはうちのつかさくむかへ奉りつねのおましとてに御供つかへ奉りぬ

明治廿三年。皇后宮行啓京都大和。敬三扈從。往返凡三十余日。有所聞見。輒手記之。及還啓。有旨索紀行。辭謝不得命。遂以所手記進。後數日。諭曰。汝刻此可也。退謀之於御歌所長高崎君。君亦從懇之。為正其誤謬。於是付工印刷。以為一小冊。顧此一時倉卒之筆。本以備遺忘耳。行文之陋。措詞之拙。可慙者甚多。今不復改。書一言於後。俾覽者知坤德含弘無所遺棄之懿焉云。

明治廿五年五月

皇后宮大夫香川敬三識